博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　井　上　　史　雄　　印

【審査結果】
この論文は、現在の日本の領土内で社会言語学的にまれな状況にある小笠原諸島をフィールドとして、面接調査やアンケート調査をもとに、方言の使用状況を考察したものである。

太平洋の孤島で、一日がかりの船でしかたどりつけず、最近までテレビ電波も届かなかった地域社会で、どのような言語が形成されたかを見るのは、社会言語学の理論からみても興味深いし、またかつて北海道や日本の植民地で行われたであろう新方言形成を眼前で観察できる点でも貴重である。いまや数少ない存在になった以前からの島民に直接会って調査し、また学校でアンケート調査を行って、貴重な言語資料を入手して、丹念に分析した。これを近年盛んになった新しい方言の形成という研究領域の中に位置づけて、理論的に位置づけた。従来研究の遅れていた地域を舞台にして、最新の理論を応用して分析した功績は大きい。博士号授与にふさわしい業績である。

審査委員会は論文審査と最終試験（公開審査）を行った結果，全員一致して博士の学位を授与するのにふさわしい研究であるとの結論に達した.

【研究の位置づけ】
小笠原諸島は、絶海の孤島で多様な住民がこの２世紀ほどの間に接触し、途中所属国家が変わり、住民がほぼ入れ替わるなどの変化があった点で、言語学・言語接触論の実験室といっていい舞台である。小笠原諸島の住民は、自分たちを「欧米系島民」「旧島民」「新島民」に３分類しており、ことばの上でも顕著な違いがある。

従来「欧米系島民」の英語と日本語に着目した研究は断片的に行われていたが、「旧島民」の日本語の性格は明らかでなく、日本各地から渡った「新島民」の日本語についても、研究はないに等しかった。

この論文では、まず多様な住民が集まった際の、新方言形成に関する過去の理論をよく見回して、相互関係をとらえて、自分なりに消化し、変化の諸段階について、考察を加えている。これまでの共通語化研究では、文章語または学校教育などを通じて、標準語・標準変種が普及する過程ととらえることが多かったが、この論文では、多種多様な方言が接触して、コイネーが形成される過程としてとらえる点が、目新しい。

続いて小笠原の言語状況を過去からたどり、初期には八丈島からの移住者が多かったことを確かめた。また、1945 年から 1968 年までの米軍施政下で、日本語の話し手が本土の渡り、英語のみが公的に認められて、公的な場での使用が限定されたことに着目する。返還後本土各地から旧島民が戻るとともに新島民も増えた。従って、日本語の新しい方言が戦前と返還後の２度にわたって形成されたと考えられる。

世界各地での新興住宅地の新方言形成が新しい研究領域として注目をあびているが、小笠原は、閉鎖的な社会で新方言が作られた点で、特徴的である。ここでの諸現象を、アコモデーション（適応・応化）理論・社会的ネットワーク理論などを踏まえて分析した。また植民地の古形残存をコロニアル・ラッグとしてとらえなおした。

【研究資料の収集と分析】
阿部氏は、論文執筆の過程で何回も渡島し、数少ない島民に面接調査を行い、貴重な言語資料を手にした。これをいくつかのテーマに分けて分析し、新方言形成の諸段階に関連付けて分析している。

語彙・文法で、小笠原特有と思われる現象を調査項目として、使用状況をみた。全国の方言資料と照合して、八丈島方言との関連が大きいこと、次に関東・東海地方との共通度が高いことを確かめた。

また、江戸時代末期に最初に定住した欧米系住民のことばの残存について考察した。いわゆる「欧米系住民」は、実はポリネシア系の人も含む。英語や太平洋ピジン・クレオール語に由来すると思われる単語が小笠原でもいくつか報告されているが、現在の残存状況を調べた。小笠原独特の植物語彙が、欧米系島民と旧島民に今でも使われていることが確認された。他に魚の名前などでは、若い世代にも残っていることが確認された。現在使われている日本語にも古い言語層が反映されたことになる。

文法面では、八丈島方言の影響が認められる。しかし八丈島方言に由来すると言い切れない現象も報告されており、孤島での独自の変化とも思われる。ただし本土各地でも似た変化があり、日本語の将来の変化方向を指し示すと考えられる。典型は、旧島民の一段動詞命令形がエ段になり、たとえばミレ、ウケレになる現象である。老若の世代差を扱った。老年層でまだ盛んに使われているが、島民のことば全体としては全国共通語化が著しい。若い世代の一部でも保たれているが、親がエ段命令形を使う地域の出身者がことに多い。文法の単純化がいかに進み、保たれるかを示すもので、新方言形成過程をよく示す例である。これを無標化とコロニアル・ラッグによって説明する。

アクセントに関しては、旧島民のアクセントが無アクセントと報告されていたことと、若い世代では全国共通語と同じアクセントが普及していることを踏まえて、様々な島民のアクセントの現状分析を試みた。若い世代で共通語アクセントの普及が進んでいることがうかがえた。一方、従来の記述的手法を超えて、ピッチ幅について音響音声学的に分析し、若い世代でピッチ幅が狭いことを見出した。旧島民のアクセントが無アクセントと報告されていたことと関係付けると興味深い。また音韻的な変化が進む以前の段階として、音声学的な区別の減少がありうることを示す。

論述の後半は、方言使用と方言意識についての、生徒のアンケート調査の分析である。メディア接触とからめて多変量解析法（林の数量化Ⅲ類）を適用し、生徒を方言意識の有無の面から４グループに分けている。また現在の若者に広がりつつある新語・新方言の具体例をあげて、東京都練馬区の生徒と対比して、語によっては小笠原で多く使われることもあることを見出した。方言意識が言語使用に影響を与え、社会的ネットワークが作用することを示した。マスコミ経由の言語変化が起こる可能性はよく指摘されるが、実証が難しい。ここ小笠原は、近年までテレビ伝播が届かない地域だったので、実験室のようなフィールドといえる。

【研究の評価】
現在小笠原の欧米系島民は、英語使用能力を失いつつある。世界中に普及して他の危機言語を追いやっている英語が、ここでは自身が危機言語の状況にある。同様に旧島民の新方言も、継承者が不足するなかで、危機的状況にある。その意味でこの論文は、貴重なデータを世に提示したことになる。

以上、島社会の特殊性をうまく生かして、貴重な資料を言語学的に活用している。あえて不足をいえば、かつての日本語北海道方言の形成過程を、復元できる可能性もあったが、考察はそこまで及んでいない、などの点が上げられる。

しかし本人は、すでに得られた談話資料の分析をはじめとして、さらに小笠原の言語の研究を進める意気込みを持っており、理論的発展も、将来に十分に期待できる。小笠原をフィールドとする他の研究者とも、共同で作業を進め、また研究成果の地元還元を目的として、報告会を開いている。また小笠原学を提唱して、専門家向けおよび一般向けの本を共同執筆している。研究者としての心構えは、十分にできているといってよい。

以上、社会言語学の潮流に大きく貢献するもので、極めて質の高い論文である。